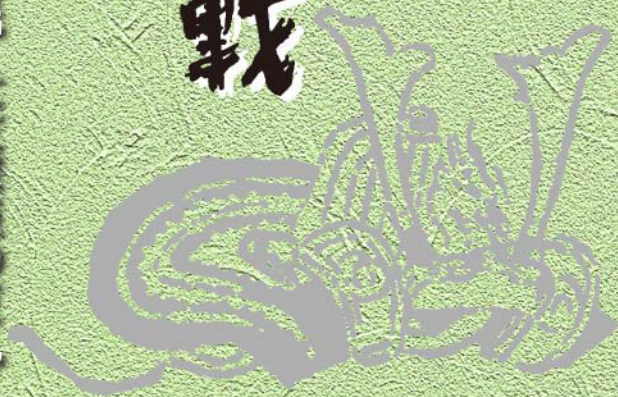


渡辺克己 著

豊後の
武將と合戦

【第十二章】大友家臣の反乱



●原著案内

本デジタルブックは、以下の書籍「豊後の武将と合戦」をデジタル化したものです。

「豊後の武将と合戦」

著者：渡辺 克己

A5 版 314 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2000 年 2 月 15 日

定価：2300 円（税込み）



購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
電 097-538-9662 「合同新聞の本」 Web ページ

※奥付け／デジタルブックについて

（題字と挿絵は二紀会委員・菅久）

目次

【写真】 田原家五重塔・国指定重要文化財

第十二章 ●大友家臣の反乱

- | | | | |
|---|-----------|---|-----------|
| ① | 日向敗戦の余波 | ⑤ | 立花道雪の撒文 |
| ② | 国東の田原氏謀反 | ⑥ | 田北紹鉄の謀反事件 |
| ③ | 危機は避け得たか | ⑦ | 田原親貫討伐へ |
| ④ | 府内急襲計画の失敗 | ⑧ | 鞍懸城落城 |



田原家五重塔・国指定重要文化財

① 日向敗戦の余波

— 離反の情報相次ぐ —

大友宗麟の日向遠征の失敗に対する責任を問う声は田原紹忍に集中した。その非難をかわすために紹忍は「国主をまどわしたのはキリシタンである」として、宣教師の国外追放や教会の打ち壊しを画策した。紹忍は、この策動に反キリシタンの重臣たちを引き入れるつもりであつたが、かえって反発をかい、戦後処理の重臣会議で押さえ込まれた。

「紹忍殿は、こたびの負け戦の責任を、キリシタン・バテレンにことごとく負わせて追放を企てておると聞いたが、真（まこと）でござるか。ちと身勝手すぎると思われてならぬが…」

と皮肉をこめて釘をさしたのは、田原親宏であつた。親宏は国東の名門田原本家の主であり、紹忍は分家の武蔵田原家に奈多氏から養子に入つた身である。その紹忍が宗麟の寵臣（ちようしん）となつて権勢を振るい、

あまつさえ田原本家の所領である国東郷と安岐郷を数年前に宗麟にせびつて奪い取っている。親宏にとつては紹忍は不快きわる人物であつた。

「いや、あの戦いについては、われらとて責任は重々感じておるが、そもそも小丸川渡河戦において、田北鎮周（しげかね）殿の無謀なる…」



紹忍が、戦死した鎮周の名を出して言い訳をしかけた。それを横合いから奪い取って口を挟んだのは、田北勘解由入道紹鉄であった。

「お待ちあれ。討ち死にした者に責任をなすりつけようとするのであるか。さようなことは将たる者のとらざるところと、われらは心得ておりますぞ。まず総大将たる者が、腹かき切つても負け戦の責めを一身に担うてこそ、武士の器量というものではござらぬか。われらはそれを期待し、そのときこそ、われらも責任を分かち合う覚悟でござった。バテレンたちには、負け戦の責任はござらぬ。ましてや討ち死にした者を持ち出すのは卑怯……」

鋭い語気であった。

日向小丸川の渡河戦で、軍議の席を蹴り、渡河一番乗りで戦死した田北鎮周は、田北紹鉄の実弟であり、紹鉄に子が無かったので、鎮周を養嗣子にして家督を継がせていた。覚悟はしていたものの、望みを託していた肉親の戦死の悲しみは深い。その紹鉄の面前で、ぬけぬけと敗戦の責任を戦死した者に転嫁しようとする紹忍の、きたない根性は腹にすえかねたのだった。

がんらい一徹者で通っている紹鉄である。齒に衣着せぬ舌鋒（ぜつぽう）に、紹忍は黙り込んでしまった。

紹忍が企んでいた、教会堂の打ち壊しやバテレンたちの追放は、これで立ち消えとなった。しかし腹黒い紹忍の心底を突き刺した、田原親宏と田北紹鉄の言葉は、何か不吉な予感を宿した暗い影となって、並みいる武将たちの胸をよぎった。その予感、間もなく衝撃的な事件となって、大友家の上下を驚かせた。

日向遠征の敗北によって、大友の旗下に屈して従軍していた北九州領国が動揺し、この機に大友から離反しかねない不安な情報が、矢継ぎ早に入っていた。その対策や国内の戦後処理などを協議するため、臼杵城に重臣を召集して、大友義統を中心に、連日会議を開いていた。

十二月中旬のことである。その日の会議に田原親宏の顔が見えなかった。親宏は、大友氏庶流の中でも重きをなしている名門である。ことに、北九州への備えとしても重要な国東の城主だ。どうしたのだろう、とささやきあっているところへ、注進が入った。

「田原親宏殿が、郎党ごとごとく引き連れて、国東へ引き揚げられた模様にござります」

「なに、親宏が国東へ帰ったと…」

真っ先に顔色を変えたのは、大友義統であった。

これは重大な出来事である。家臣が主君の許しを得ずに、黙って自分の城へ引き揚げるのは、明らかに反逆の意思表示である。このことは、直ちに宗麟へ報告された。

② 国東の田原氏謀反

― 田満解決へ重臣動く ―

田原親宏が無断帰城し、謀反の気配があることを知らされた宗麟は、

「うむ…」とうなずいて、しばらく考えていたが「ことと次第によつては、糾明（きゅうめい）の兵を動かさねばなるまいが―親宏に何か言いたいことがあるかもしれない。しばらく

待つてみよう」

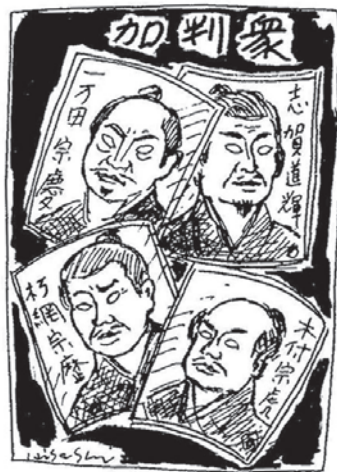
親宏が突如このような行動に出た根が、どこにあるか宗麟の脳裏をよぎるものがあつた。それは数年前、宗麟の正妻の兄であり、寵臣（ちようし

ん）でもある田原紹忍の望みを入れて、親宏の所領の一部を取り上げて紹忍に与えたことである。さらに今回の日向敗戦の責任を負うべき田原分家の紹忍を不問に付して側近に復している。これらの不満が、一度に噴き出したのだ。今や実力のある国東田原家と、ことを構える大友家の現状ではない。言い分があれば聞き入れて、穏便に収めたい、と考えたのだ。

家臣たちも宗麟と同じ思いであつた。もしも親宏が反大友の勢力である北九州の秋月、竜造寺らと組んで府内を襲えば、防ぐことは不可能ではないか。敗戦の痛手と不満を抱えている将兵が府内の防衛に積極的になるとは思えない。

そこで「この事態の打開に何らかの手を打たねばなるまい。事を荒だててはならぬ」と、重臣たちがなだめ役をかって出た。それは加判衆の志賀道輝、一万田宗慶、朽網宗歴、木付宗虎の四人である。

加判衆というのは、大友氏領国支配の中枢的役割を持つ家臣団の中の、上層部に位置する役職である。ことに志賀、一万田、朽網三氏は南郡衆の有力者である。南郡衆はこの度の日向遠征には最も批判的で、出兵には肥後迂回陣で結局戦闘には参加し



ないで帰還していることは前にも述べた。

国東木付城主である木付宗虎は本隊に加わって戦い、敗戦に際しては、殿（しんがり）をつとめて、残兵を収集して帰国し、宗麟に激賞されている。

この四人が協議し、連署で親宏に書状を送ったのである。暮れも迫った十二月二十六日である。加判衆としては、親宏のこの度の行動を反逆と認めたくない、穏便な次のような内容である。

「この度の突然のご帰国について、だれにもあいさつすることなく、理由も告げなかったことは、訳がありであろうが、我々は驚きました。遺憾なことでありました。ついては、しばらくご休息になり、来年春早々にはぜひご出府あるよう、お待ちします。なお筑前方面の動きが容易ならぬと見受けられますので、ご油断なきよう頼みます」

親宏の気持ちを十分に察した上で、核心にはわざと触れず、円満な解決を望んだ加判衆の気持ちを、親宏もくみ取ったようで、これに対する返事ともとれる書状が、年が明けた早々に義統あてに届いた。

「不穏な筑前方面の軍勢が、南下の動きがあると聞きましたので、これに備えるべく、豊前方面の守りに我らが兵を動員しました。事態が急と心得ましたので、言上する暇もなく帰国致した次第です。つきましては、わが領内の総力を挙げるについて、先に分家田原紹忍殿に与えられたわが旧領国東、安岐二郷が、他領であることは不便にて、種々差し支えがございます。この際、旧のごとく回復いただきたく願ひ上げる次第です」

という意味の内容である。筑前の不穏な動きに対して兵を守りにつかせることで、反逆の意志のない証とし、同時に日ごろの不満の種である旧領回復の要求を、はつきりと示したのである。

田原親宏の今回の不審な行動の本心は、筑前の秋月種実と組んで府内を攻め、豊後に新しい風を吹かせたかったのだ。秋月種実の室には親宏の長女が嫁しており、両家は姻戚である。しかし加判衆の連名で、友情のこもった、円満な解決を望む書状を届けられては、これを踏みつけにして府内に刃を向けるわけにはいかず、要求だけを示したのだ。

③ 危機は避け得たか

—— 親宏の死で事態急変 ——

田原親宏の、旧領回復の要求をはつきりと示した書状を見た若い大友義統には、事態の深さも親宏の心のひだも読めなかった。

「旧領を返せとは、上を侮るも甚だしい。国東の領地を動かしたのは、父のお考えがあつてなされたこと。今さら何を…」と、手紙を放り出して憤まんをぶちまけるだけで、加判衆の意見を聞こうとしなかった。

事態が好転に向かっているのに、これでは再び荒立てることになる、と考えた加判衆は、直接宗麟に訴えた。

「田原親宏は、これまでも豊前方面平定に再三出陣して功績を現しております。この度の行動は不穏に見えましたが、書信によると、筑前に備えて豊前に兵力を派遣し、忠誠を見せたの

でありました。彼の旧領回復の望みをかなえて、国内安泰を図るべきではないかと愚考致します。田原紹忍に与えていた領地を、この際取り上げて旧に復するのは、日向の戦いの責任を明らかにする点でも、家中は納得すると思います」

と、言葉を尽くして進言した。

宗麟も、親宏問題に心を痛めていたところであり、むしろ加判衆らの進言を待っていたようで、意見に従って直ちに義統を呼んで、田原紹忍に与えていた国東、安岐二郷を親宏に戻すよう処置することを命じた。

かくて天正七年（一五七九）十一日付けの、加判衆連名の奉書で、親宏に旧領返還の伝達が、急使をもつてなされた。

これで田原紹忍は、国東・安岐の領地を失い、宇佐郡妙見岳城に蟄居（ちつきよ）した。紹忍に向けられていた日向敗戦の責任追及もこれで一段落、親宏事件も穏便に終息した。

親宏にとつては望みどおりに解決して、不満のタネはなくなつたわけだが、一つ重い課題を抱えこまれた。

それは旧領回復の際、宗麟の望みとして、宗麟の二男親家を田原本家の養子にして、家督を継がせてもらいたいから、考慮してほしいという条件がついたのである。



親宏には男子がなく娘ばかりなので、ムコ養子が必要であり、大友家から迎えば両家とも安泰で良いことだ。宗麟はかねてからそれを望んでいた。ところが、

親宏は既に豊前馬ヶ嶽城主長野種信の子親貫をムコ養子にしているのである。親貫は日向遠征にも従軍しており、宗麟も知っているはずだから、親貫を離縁してでも自分の子を迎えよという無体な要求である。宗麟としては、反大友色の濃い豊前との縁組みを、田原家がしたことを好ましく思っていないかったので、この機会に改善したかったのだ。

親宏は頭をかかえこんだ。田原家の家臣の中にも、大友家との縁組みに賛意を唱える者が出て、家中は賛否の議論に沸くありさまである。この課題は、へたをすると重大な事態を招きかねない。

ところが事態は急変した。親宏がこの課題を背負ったまま、この年（天正七年）九月十六日に急死したのである。背にできた悪性腫瘍（しゅよう）が命取りとなった。

親宏の死を喜んだのは、妙見岳城に引きこもっている田原紹忍である。目の上のタンコブが除かれたのだ。宗麟もあるいは、その知らせを聞いて内心喜んだかもしれない。大友家を脅かす一つのガンが取れた。あとは親貫を料理すればよいからだ。

ところが親宏の死で田原家の家督を継いだ親貫は、継承後三カ月も経たない十二月に、突如大友へ反旗をひるがえし、府内攻撃の挙に出た。この三月足らずの間に、親貫に挙兵の決意をさせたのは何だろうか。

まず考えられることは、宗麟が妙見岳城の田原紹忍と連絡をとって、田原本家の家臣の中の、大友に心を寄せる者、あるいは紹忍に恩顧ある者を手なづけ、内部から結束を切り崩し、親貫を追放する画策が忍び寄っていることを知ったのではなからうか。

④ 府内急襲計画の失敗

— 大水軍を阻んだ時化 —

田原親貫に府内襲撃を決意させた理由の一つは、死亡した先代親宏の遺志でもあった。親宏は加判衆の友情あるとりなして、旧領回復の要求と引き替えに、府内襲撃を取りやめたが、本心は府内に討ち入りたかったのだ。その気持ちは親貫に打ち明けていた。

親貫は、国東の浦々に強固な戦鬪力を蓄えている浦辺衆を召集した。この大水軍をもつて豊後湾を直進し、府内を急襲する計画をたてた。この戦法は、亡き親宏のたてていた襲撃計画であつただろう。

「府内は沖の浜に一挙に上陸する。今の府内の防備力では、我らの攻撃を防ぐことはかなうまい。大友館を占拠することは、亡き父のお考えを実現することでもある」

親貫は家臣たちにそう説明した。

計画通り事が進めば、この急襲は成功したかもしれない。しかし天は親貫に味方しなかった。十二月の下旬、大水軍が兵を満載して国東の浦をこぎ出し、沖合に出たころ、天候がにわかにくずれ大時化（しけ）となったのである。

これには海上の猛者たちも手のほどこしようになく、大きな痛手を負って国東へ引き返さざるを得なかった。損害を受けた水軍の再編成には時間がかかる。しかし謀反の軍を動かした以上は、大友方から討伐の攻撃があると覚悟しなければならない。親貫は、本拠地飯塚城や別城である安岐城をも固めると共に、一族の如法寺親武らに命じて、来縄郷（現豊後高田市）佐野の



鞍懸（くらかけ）城を修築し、一族を入城させて守備を厳にした。鞍懸城は豊前国境に近く、筑前の秋月氏や肥前の竜造寺氏、さらに周防の毛利氏など、反大友の勢力からの応援を受けやすい。むろんこれら諸氏へ援助依頼の使者は挙兵に先立って走らせてある。

田原親貫謀反の知らせに、義統は直ちに重臣会議を開いた。田原紹忍も列席し、上席者としてまず口を切った。

「国東の変はお家の一大事。早急に討伐の軍を起さずば、親貫の求めに応じて秋月、竜造寺らの来攻ともなろう。面倒なことになる。ここで我らの忠誠心を結束してことに当たりたい」だが、紹忍の発言に対しては、座はしらけた感じで反応はにぶい。加判衆も煮え切らない態度である。このとき、きつと面を上げて発言した者がある。田北紹鉄であった。

「田原親貫殿の謀反は、田原本家に何事か言い分があつてのことに違いない。これにはまず田原分家の紹忍殿が、命をとんでも国東に駆けつけ、言い分を問ひ質（ただ）し、暴挙をたしなめるが先決ではござらぬか。今すぐ出陣と申しても、国内は日向合戦の痛手も十分に回復しておらず、勢ぞろいは手間取りましょう。それがしは老齢、弟鎮周（しげかね）は日向で戦死、お許し願えなら出陣は遠慮つかまつる」

田北紹鉄としては、再び上席に

座り込んで大きな顔をしている田原紹忍への面当てのつもりであった。それに親貫が謀反に走った理由は、ひそかに耳にしているから、親貫への同情の心も動き、つい一徹者の度が過ぎた。主君の前で出陣の辞退は穏やかでない。義統も紹忍も苦り切ってしまった。

田北紹鉄は、重臣会議の後、朽網（くたみ）郷の自城、松牟礼（まつむれ）城に引きこもってしまった。

田原親貫謀反に対する討伐の重臣会議が、このようにぎくしゃくして進展しない事態は宗麟の耳にも入った。これは義統の統率力や信頼の問題でもあり、大友家の土台がゆるんできた証左だ。

とりわけ今回の親貫謀反の裏面には、国東の田原家に、宗麟の二男親家を送り込み、豊前の長野家から迎えている親貫を追い出そうとする陰の工作があり、宗麟の関与していることだ。討伐のことは早急に運ばなければならぬと心はあせった。

⑤ 立花道雪の檄文

— 南郡衆の心をゆるする —

国東の田原親貫謀反に対して、大友家の重臣たちの動きのなぶさはお家の一大事だ。この危殆に活を入れた純忠の人がいた。その人は、大友の出先である筑前国立花城の守りにについている老臣立花道雪であった。

道雪は、もと大野郡鎧岳城（よろいたけじょう、大野町）の城主で、南郡衆の一人であった。もとの名は戸次鑑連（あきつら）といった。若くして落雷のため足を傷つけ、歩行困難となり、

以来、輿に乗って軍陣の指揮をとってきた勇将で、数々の戦陣で功名をあげている。宗麟の信頼も厚く、北九州の備えを固めるため元龜二年（一五七一）に筑前立花城主に任じられ、姓を立花と改めた。一説では、宗麟に直諫してはばからない道雪を、宗麟はけむたがって北九州に遠ざけたという。

日向遠征の失敗以来、大友家の屋台骨がぐらついている豊後の行く末を憂えた道雪は、九力条にわたる檄文（げきぶん）を、南郡衆あてに送り、奮起を促したのである。書状が届いたのは二月中旬、南郡衆十二人の名が連ねてあった。田北紹鉄の名も入っていた。もしも紹鉄が読んでいたら、重臣会議で突出した発言をして自城に引きこもることもしなかっただろう。書状はそれより一足遅れて届いたのだ。

内容は、まず田原親宏、親貫反逆の事情には同情するが、これはお家の一大事であるから、おのおの方は誤りのない態度をとってほしいとし、大友家が無用の日向遠征をして大敗したことや、天竺宗（てんじくしゅう、キリスト教）になって寺社を破却し、仏神を河に捨て、薪にするなど『前代未聞のありさま』と手厳しく批判しつつ、義統様は主家の若様であるから、たとえ非道のことがあっても、おのおの方が意見を申し上げ、お諫め申すのが臣の道であると断じ、親貫の反逆は、親宏存命中、田原紹忍に対する上様（宗麟）の法外の優遇のための不和が原因であるが、反逆の企ては許さるべきではない。討伐の命令が出れば一刻も猶予することなく成敗すること。この乱には上様ご自身が出座して、びしびしと下知下されなければ、かえって敵の思うつぼにはまる。など一致協力して危難に当たるべきで

あると憂国の思いを切々と述べてある。

道雪の檄文は南郡衆の心をゆすった。事態打開のため話し合いが始まった。親貫討伐の遂行に一致して動き始めたのである。

しかし日向遠征の失敗で戦力の弱まった現状では、強力な統率力が必要であり、若い義統の指揮では不安である。そこで南郡衆は宗麟に次のような要請をした。

「国内の危機を打開するためには上様（宗麟）の再出馬を仰ぐことが絶対に必要であること。義統様の側近に重用している好ましからざる臣数人を追放すること」

宗麟は、この要請に対して、義統の引退だけは拒否した。親の気持ちとして、出来の悪い子ほどかばいたくなるものである。「わしが力を尽くして過ちのないよう義統を助ける。それで良いではないか。皆も補佐を十分にしてもらいたい」

こう強く言われては返す言葉もない。重臣たちは義統をたてて親貫討伐に結束することになった。

宗麟も積極的に動き始めた。

都合のよいことには、国東の田原家の重臣に、大友に内応している津崎鎮兼、萱島美濃入道などがいた。彼らが大友に内応した理由はこうである。

「国東の田原家は、豊後大友初代能直公の庶子・泰広様を祖とする大友氏庶家である。それが田原紹忍のために、宗家筋の



大友家ときしみが生じた。これを修復し、田原家を安泰にするには、大友家から家督相続者を迎えるにこしたことはない。そこでわれわれは一致して大友家より親家様を迎えることに同心して力を尽くす」

親貫の暴走に従って行けば、いずれは田原家の滅亡を見ねばならぬ。主君に背いても、ここで阻止するのが忠の道だ、というのである。悲壮な選択である。

⑥ 田北紹鉄の謀反事件

—— 計画文書拾われて露見 ——

大友方の田原親貫討伐の戦略は、まず宗麟の次男親家を、国東田原家の正式な家督相続者として、強引に国東に送り込むことで、親貫反乱の足元から切り崩すことにした。

親家には補佐役として、宗麟の側近で信任の厚い柴田礼能をつけ、兵五千を与えた。大友に内応している田原家の重臣津崎鎮兼、萱島美濃入道らの手引きで国東の浦に上陸、津崎らがひそかに準備してある小門牟礼城（おとむれじょう／雄渡牟礼とも書く、国東町成仏）に入った。天正八年（一五八〇）二月の下旬であった。

ところが、親貫討伐の動きのあわただしい大友の内部に、おかしい噂が流れてきた。

討伐の出陣を正面きって断って、朽網郷の松牟礼（まつむれ）城に引きこもっている田北紹鉄が、親貫の乱と呼応して謀反の計画がある。しかも筑前の秋月種実と盟約を結び、南北から府内を攻撃する企てがある。その計画文書が拾われて老中に披露

した者があり、謀反が露見したというのである。そして宗麟が激怒し、紹鉄に切腹を命じたが、その命に伏していない、というまことしやかな噂までささやかれた。

この噂に驚いた紹鉄は、身の潔白を訴えた文書を、田北一族あてに送っている。それは、身の潔白を証せるなら切腹してよいという、次のような悲壮なものであった。

「…紹鉄は、ご両殿様（宗麟・義統）に対し奉り、毛頭私曲（反逆）の心はないのに、讒言（ざんげん）をなす者があったのか。殿が何かにご立腹なされたのか、切腹せよとお命じになったという噂が各方面から入ってきた。まことに是非もないことであるが、自分一人が切腹して一族が安泰ならありがたい。このことを老中によく理解していただくようお願いする」

この文書に見る限り田北紹鉄には反逆の意志はまったくない。とすれば「紹鉄謀反」の噂を、計画的に流した者があるのだ。それはだれか。考えられるのは田原紹忍である。紹忍にとつては、一徹者田北紹鉄は目障りでならない人物だ。田原親貫の乱への出陣を、重臣会議で拒絶し自城へ引き揚げた今こそ、謀反に結びつけて噂を流し、失脚させる絶好の機会として工作したのではないか。

たのではないか。



大友方としては、国東の乱に対処せねばならぬこの時、背後に不安があつてはいけな。まずこの憂いを除くべきであると一決し

た。大友義統は南郡衆の志賀、朽網、一万田、戸次ら有力者に紹鉄討伐を命じた。南郡衆なら同じ南郡地域に城を持つ紹鉄を討つのに、兵を集めやすい。それに、とかく口うるさい南郡衆の、有力者であった紹鉄を討つという、重大な任務を持たせることで、大友内部の結束を強めるとふんだのだ。

討伐を受けると聞いた田北紹鉄は、熊牟礼城を出て、熊牟礼城（大分郡庄内）に移った。熊牟礼山（標高八百余メートル）は険しい山容で、山上の砦にこもれば、容易に落とすことができない。ここに我慢強く立てこもっておれば、そのうち誤解を晴らす機会もあるという心頼みもあったのだ。南郡衆なら、自分の胸中を理解してくれるだろうという望みも捨てきれなかった。

紹鉄討伐の命を受けた南郡衆は、すぐに腰があがらなかった。この事件に釈然としない思いが強かったのだ。ようやく重い腰をあげたのは四月初旬であった。挟間に兵を集結し、陣を整えて熊牟礼（くまむれ）城を取り囲んだ。

だが積極的に攻撃しなかった。峻険（しゅんけん）な山城である。無理押しに攻めれば互いに損害は大きい。犠牲を出さないうで解決する道を探るべきだと将たちは考えたのだ。

南郡衆は相談の上、紹鉄へ使者を送った。

「ひとまず筑前方面へ難を避け、時節を待つが得策ではないか。ここであたら血を流し合うのは無益なことである。城を明け渡せば、田北家は、日向の戦いで没した鎮周（しげかね）殿の養子統員（むねかず）殿の跡目相続を許されよう。われわれも力を尽くす。さすれば田北一族は安泰である」と、こんこんと説得した。

⑦ 田原親貫討伐へ

— 北九州の動きににらみ —

田北紹鉄は、南郡衆の友情ある配慮に感謝し、城明け渡しを決めた。

「わしがすべてを背負って落ちよう」

従者五十騎ばかりに守られ、妻を連れ、涙をはらって熊牟礼（くまむれ）城をあとにした。

しかし紹鉄には運がなかった。一行が日田郡大山川のほとり井手口松原村（現大山町）にさしかかったとき、日田郡の武士財津、堤、池辺らの兵に取り囲まれ、ことごとく討たれた。天正八年（一五八〇）四月十三日であった。ここに日田郡の武士が待ち伏せていたのである。

すると、紹鉄の城明け渡しの情報入手し、落ちて行く紹鉄一行より先に、日田に密使を走らせ、待ち伏せて討ち取るよう手配した者があったわけだ。それはだれであったのか。読者の想像に任せよう。

田北家は約束どおり南郡衆の強い要請もあって、養子統員（むねかず）の跡目相続が許された。統員は国東の屋山城主吉弘鎮信の二男。統員の兄統幸（むねゆき）は、のちに石垣原合戦で大友義統を守って華々しく戦死した名将である。

田北紹鉄の事件は片づいた。背後に不安を感じることなく、田原親貫



（ちかつら）討伐に総力をあげることができる。

大友宗麟は、速見郡日出荘辻間村まで出向き、全軍の指揮をとった。

義統を総大将とする本隊が、速見、山香方面へ陣を進めたのは六月に入ってからであった。まず親貫の主力の拠る来縄郷佐野（豊後高田市）の鞍懸城を包囲した。

これに呼応して、先に国東の小門牟礼（おとむれ）城に、田原の重臣らの手引きで入城している大友親家の軍が、安岐城の攻撃を開始した。また宗麟は、宇佐郡佐田の佐田鎮綱らに応援を要請し、妙見岳城（院内町香下）の田原紹忍と協同作戦をとって、豊前方面からの親貫応援軍の防備に当たらせた。豊前方面からは、城井（きい）鎮房ら反大友の勢いが動く情報が入ったからだ。

そのころ筑前の立花道雪から、宗麟へ急使が来た。

「筑前秋月種実の所へ、田原親貫の使者がたびたび来ており、秋月が援軍を差し向ける動きもうかがえるので油断なきように」

と北九州方面の動静を知らせたものであった。

筑前の秋月種実、肥前の竜造寺隆信など、大友に敵対している北九州の雄は、親貫からの救援依頼を受けたのを好機に、大軍を繰り出し大友をたたきたいところだが、筑前には大友が北九州の押さえに備えた立花城の道雪、岩屋城の高橋紹運ら豪の者がにらみをきかせているので、うかつに動けないのだ。しかし、いつ田原親貫討伐軍の背後を襲うか目を離せない強敵である。

親貫は、大友の討伐軍の動きが急になると、急ぎ本拠地の飯塚城を出て、要害堅固な鞍懸城に入った。鞍懸城は標高一〇メートルの丘陵上にあるが、頂上付近は断崖をなし、南東側は桂川に面し、急傾斜が多くて自然の要害をなしている。

鞍懸城の名は、南北朝騒乱の際にも見える。正平二十四年（二三六九）に、鞍懸城に拠る南朝側の軍を、北朝側の大友一族である田原直貞（田原家四代）が攻撃。その五年後にも田原氏能（六代）がここで南朝軍と戦って功名をあげている。もともとこの当時の鞍懸城は、佐野より少し南寄りの奥畑にある旧鞍懸城ではなかったかとの説がある。

次に天文三年（一五三四）に、大友と周防の大内軍が激突した勢場が原合戦の時、田原親宏が佐野の鞍懸城をかためて豊後の守りについた。

このように、鞍懸城は、国東の名門田原氏が、宗家大友のために戦った歴史が刻まれているのだが、運命は皮肉である。田原家の養子となった十五代親貫が、不運な迷路にずるずると引き込まれ、逆臣となってこの城に立て籠（こ）もり、大友の軍に討伐されるはめとなった。

⑧ 鞍懸城落城

— 援軍敗退で形勢逆転 —

大友親家らが取り囲んだ安岐城は、安岐川の川口に臨んだ丘陵に築いた城塞（じょうさい）で、東は海に面した絶壁をなし、南は安岐川、西北は水壕（すいこう）を設け、守りは固く攻撃しにくい城である。

田原親貫は、安岐城に有力な家臣を配置し、自身は鞍懸城に拠（よ）り、この二城に命運を託したわけで、戦いが長引けば、大友を敵としている北九州の秋月、竜造寺、さらに中国の毛利の援軍が攻め込んで来る。そうなれば豊後の大友は崩壊するという計算である。秋月、竜造寺とは早くから連携をとっているし、中国の毛利輝元には、田原一族の如法寺親並・親武父子を四月ごろ送って、救援の約束をとりつけてあるのだ。

大友親家軍による安岐城攻めは、天正八年（一五八〇）七月半ばから始まるのだが、それより前に、思いがけぬ抵抗が、安岐郷の民衆によって起こされた。先祖代々、田原氏に治められ、恩義を感じている安岐郷の農民たちが蜂起（ほうき）して、郷内の臨済宗の古刹（こさつ） 實際寺に籠（こ）もり、大友に対する反抗を示したのである。

この民衆の一揆（いつき）は、親家軍に協力している木付鎮直、清田鎮忠らが鎮圧したが、国東地方に根を深くおろした田原氏の歴史の重みをみせた事件であった。

實際寺の伽藍（がらん）はこのとき焼失したが、本尊の十一面観音像は火炎の中から救出され、後に再建された同寺の寺宝となっている。

安岐城の攻防は、城兵がゲリラ戦法をとり、包囲軍は悩まされた。

一方、中国の毛利輝元の軍は、約束によって兵船数十艘（そう）をした



てて八月二十日安岐浦に侵攻してきた。ここより上陸し、親家軍の背後を突く算段だったようだ。

大友方は毛利の来攻をいち早く察知して、若林鎮興（しげおき）の率いる水軍が、これを迎え討った。鎮興は佐賀関を本拠としている海部（あまべ）水軍の頭領である。海部水軍精銳の迎撃の前に、毛利勢は激しく手向かう様子もなく、たちまち退却に転じた。海部水軍はこれを周防灘まで追撃して引き返している。

毛利の救援軍を撃退したことは大友勢の士気を高め、逆に安岐城側の気鋭をそいだよう、安岐城はついに高櫓口（たかやぐらぐち）を突破され、総くずれとなつて落城したのは十月六日という。

安岐城を落とした親家軍は、鞍懸城攻撃の応援にどっと寄せて行き、総攻撃を展開した。

これまで、どちらかといえば田原寄り、情勢を見ていた国東各郷の武将の多くが、田原親貫に見切りをつけ、大友側について総攻撃に参加しており、大友勢の士気はあがる一方であった。親貫が頼みの北九州からの援軍は、立花道雪のにらみの前に、ついに兵を動かさなかった。

親貫は大剛の武将であつたと伝えているが、しょせん宗家に背いた反逆者であり、孤立状態では抵抗にも限界がある。鞍懸城の落城は天正八年（一五八〇）十月九日であつた。

『大友興廢記』には、落城を覚悟した親貫の最期の言葉を次のように記している。

「天我を亡す。これすなわち天命である。天を怨まず人をと

がめず、ひっきよう我が心から起こった因果である。いざ太守の大軍を引き受け、切腹することは武士の面目である。皆の者も手柄を尽くして討ち死にし、名を後世に残し笑いものになるな」

親貫は城中で切腹して果てたことになっているが、一説には、筑前秋月氏を頼って逃れ出たが、宇佐の豊前善光寺付近で、地元の武士時枝氏に討たれたという。

国東の田原家は、宗麟の念願通り大友親家が継承し、田原常陸介と名乗った。親家は父宗麟の影響を受けた熱心なキリシタンで、ドン・セバスチャンの教名を受けている。田原家継承後、豊前の反大友の勢力や筑前の秋月種実と戦うなど働きがあったが、激しい性格から天正十四年（二五八六）義統と不和になり、薩摩の島津と通じるなどの事件があった。このため国東の田原領は没収、親家は各地を転々としたあと宗麟のとりなしで臼杵に住み義統とも和解。朝鮮の役にも従軍した。





オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「豊後の武将と合戦」 第十二章●大友家臣の反乱

2008 年 8 月 22 日初版発行

著者 渡辺 克己

原著 2000 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社

／制作：大分合同新聞社文化センター／印刷：小野高速印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

(〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

© 大分合同新聞社、渡辺克己、菅久

◇著者略歴◇渡辺克己

大分県佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、芸芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退社。昭和二十七年から同四十三年まで大分市社会教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。

郷土史を研究し「大分今昔」「豊後の磨崖仏散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」等の著書。